伊勢湾台風から60年

今日で伊勢湾台風から60年。1959年9月26日は土曜日だった。名古屋市立千種小学校から昼に下校した時、生暖かい風が吹いていた。夕方から猛烈な風雨が吹き荒れ、「鉄道官舎」2階の自宅雨戸を必死に押さえ続けた。あの時の恐怖は忘れられない。

そのころ、名古屋南部は高潮の被害により、多くの人が犠牲になっていた。3年前の猛暑の日、名鉄常滑線の柴田駅で降り、天白川の堤防沿いを歩いた。伊勢湾台風では、この堤防が決壊して、川より低い住宅地に大量の水が流れ込んだ。名古屋市内で最大規模の犠牲者を出した地域だ。

白水小学校へ行った。142人もの児童が犠牲になった小学校である。校庭の一角に、伊勢湾台風の悲劇を伝える「友情の碑」があった。2.75メートルの台座まで水が押し寄せたという。

あれから60年の月日が流れた。朝日新聞9月19日「天声人語」に、白水小学校のことが書かれていた。生き延びた児童たちによる作文集。読み進むと目頭があつくなった。60年目の今朝、レポートに綴った。

「その日は、秋晴れのよい天気でした。ゆっくり流れて行く白い雲に、別れ別れに、なってしまった母や父や妹のことを、たずねてみました。雲は、だまっていました」。伊勢湾台風で家族を失った小学5年生久野みき子の作文である▼60年前の9月26日、東海地方を直撃した台風は、5千人を超す死者・行方不明者を出す。港に近い名古屋市立白水小学校では142人もの児童が犠牲になった。生き延びた子どもたちによる作文集が、21日から名古屋市博物館で公開される▼「暗いどろ海の中を、早い流れにのって、流されました」と書くのは6年生相根美弥子さん。「お母さんが、『お父ちゃん！みやこ！幸男！』と言ったかと思うと、私のかたにかかっていた、手がはずれてしまいました」▼土曜日だった。夜、川の堤防が決壊し、貯木場から材木が街へ流れ込む。「たたみがぶくっとういた。もう足首まで水があった」と5年生水野洋子さんはつづる。水位が上がり、逃げ出すいとまもない。「天井に手がとどくようになったその時は、むねがしめつけられるおもいだ。お父さんは（天井板を）げんこつで『ガンガン』とたたく」▼市博物館の瀬川貴文学芸課長(42)は直筆の作文を整理しながら、多くの書き手と会ってきた。「当時を語り、涙を流す方もいました」▼屋根の上で何日も暮らしたこと、亡くなった級友の家を訪ねたこと―。原稿用紙は変色し、誤字や脱字もある。小学生がつむいだ言葉の壮絶さに打たれた。

（2019年9月26日）